

地球史探訪
平成25年5月19日付けメーリル
マガジン

THE GLOBE NOW

歴史教科書読み比べ

聖徳太子の描いた理想国家を具現化しようとしたのが大化の改新だった。

1. 「戦争に備える国づくり」と独裁的な政治に対する不満

大化の改新前夜の国内外の状況を東京書籍(東書)版は以下のように説明する。7世紀の中ころ、唐が対立する高句麗を攻撃し、そのために朝鮮半島の国々では緊張が高まりました。日本でも戦争に備える國づくりを急がなければなりませんでしたが、そのころ国内では、蘇我氏の

蝦夷は、天皇のようにふるまい、自分の息子をすべて王子と呼ばせた。蝦夷の子の入鹿も、聖徳太子のさえ、天皇を中心とする國づくりを求める機運が生まれた。このころ、太子が派遣した留学生があいつで帰國し、唐の進んだ政治制度を伝えたことも、長男の山背大兄王をはじめ、太子の一族を一人残らず死に追いやった。

またわたしについて戦つたために、親を失った嘆きを人民たちに与えたくない。戦いに勝つばかりがではない。身を捨てて國のもといを固くするのでも、また男ではないか。」[3, p.200]

王は法隆寺に入り、「わが身を入鹿に賜う」と述べて、妻子・兄弟23人一簇とともに自害して果てた。坂本博士は、こう結ぶ。

日本だけであった。「2, p.55」

元年とした東アジアで中国の王朝が定めたものと

は異なる。独自の年号を制定して使用し続けた國

は、日本だけであった。「2, p.55」

大化元年に始まるこの改革を、大化の改新と呼

ぶ。大化の改新は、聖徳太子以来の理想を実現する

ために、と臣下の区別を明らかにして、日本独自の方針を打ち出した。

翌年には、これまで皇族や豪族が私有していた公地・公民として國家が直接統治する、公地公民の集中をめざしました。」[1, p.33]

これでは生徒たちは、権力争いに勝った皇子が、

さらに絶対的権力を握ろうとした、と読んでしまう

だろう。特に「国家の直接の支配」とか、「権力の集中」などというマルクス主義臭のする用語を使つ

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まっていました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まっていました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まっていました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まいました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まいました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まいました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まいました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まいました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄皇子は、645年、

中臣鎌足(後の藤原鎌足)らとともに蘇我氏をたお

して、父・蝦夷と自分のために陵(巨大な墓)を作

った。天下の人心が蘇我氏を離れ、山背大兄王に

向かうと、643(皇極天皇2年)1月、入鹿は

軍勢を出し、斑鳩の王の住居を襲つた。

王の従者はちは戦つたが、多勢に無勢。

王は妻子

を失つたが、

中学生の心にも訴えかけるものは何も

ない。

この部分を、東京書版では、冒頭の「蘇我氏の独裁

に対する不満が高まいました」に続い

て、こう書く。

この情勢を見た中大兄



杉村報告の黒幕は堀口か

◆前史編◆

(11)



堀口九萬一(『物故者列伝』20頁)

日露戦争は移民史の転機

反対の報告書を上げてい

た。

ところが杉村清

公使で一変する

臨時公

使から二等書記官に戻つ

た。

使は着任したての杉村

ではなく、間違ひなく

浜沢栄一が主催した

に、サンパウロに藤崎商

助は決意を固め、藤崎

商会のブラジル出店を決

め、翌1906(明治3

9)年に早々と実行し

た。藤崎二郎助は、第一

回移民の入植に先立つ

こと二年、明治三十九年

9)年に早くと実行し

た。藤崎二郎助は、第一

回移民の入植に先立つ

こと

